



佑啓

社会福祉法人 佑啓会 ふる里学舎

〒290-02 市原市今富1110-1

☎0436-36-7611

発行者 里見 吉英

編集者 三股 金利

地元交流スペース

里見 吉英

「えんちよ、あれ、だれがすむんだ？おれか？」工事用の足場もとれ、姿を現した地域交流スペースをながめながら五十二歳になる彼が話しかけてきた。
石川さん、最初に住むかい？
「いいよ、いいよ、おら、こっちがいい」
「どうして」
「いいよ、おら、こっちがいい」と呟きながら察へ戻っていった。
ふる里学舎に入る前は、親兄弟もなくひとりで生活していた(持ち家にて)彼は、もとの暮らしに戻ってしまうのではないかという漠然とした不安もあるのだろうか、思いがけない答えだった。それというのも、昨年工事が始まり徐々にどういう建物になるのか寮生に浸透するにつれてみんなの関心は、誰が最初にあそこで生活するかで話が盛りあがっていたので、ついみんなさうなのかなと思ひ込んでしまっていた。やはり人それぞれ。

地域交流スペースは地域との交流の場。そこから生まれる心身機能の発揚。要するに、地域の方々には、障害者及び障害者施設への理解、寮生には交流から生まれる種々な刺激により、より豊かな生活を送るという目的でつくられた国のモデル事業のひとつです。
学舎開所当時から計画され、ど

のような建物が一番効果的か検討を重ねた結果、最終的に二世帯住宅をイメージして設計されました。大きさは8LDKの七十坪。二階部分は、主に寮生の生活スペース。一階はゲストルーム、多目的の和室、リビングルーム、キッチンという間取り、お風呂と洗面所、トイレは一・二階それぞれに設けました。職員の話題もどのように使っていくのか、この建物の話題が増えてきたようです。
近所から通勤してくる厨房の調理師さん。
「施設長、あたしらもあいうところ使ってみたいな。」
「ああ、いいですよ。どんどん使ってください。」
「え、本当ですか。地元の若妻会でもやろうかな。」
そして生け花クラブの面々は、「あそこの和室で先生をよんで生けよう。」



(施設長)

調理クラブのメンバーは「これからはわざわざ遠くまでいなくてもあそこのキッチンでできる。」はたまたカラオケクラブまで「見晴らしいからあそこで歌ったら気持ちいいだろうな。」など等いろいろの意味でよい刺激となるスペースになることは間違いないでしょう。
最近の厚生省の予算の現状をみますと滑り込みセーフといった感じで完成したこの建物が効果的に機能し、成果を上げることによって今後このような余裕のスペースとでもいいましょうか、そのような空間が施設で更に展開できるような急いでやみません。
八月二日の納涼祭の時は自由に見学できるようにしますので、お気軽にお立ち寄りください。お待ちしております。
最後に石川さんの一言。
「えんちよ、あそこに、わかいおんないっぱいとまりにくっか。」
(注)若い女Ⅱ短大の実習生

あらがる

石井 由紀子

「選択メニュー」という言葉が聞かれて久しいですが、学舎でも昨年から試みています。これまで、献立の一つずつにこだわり、いかに質の高いものを提供することが出来るか、という点を課題に進めてきました。

それというのも、「給食は手づくりが基本であり、いかにおいしいものを提供できるかが、厨房の手腕による。」と、開所当所から幹部に言われ続けたことにほかなりません。特に施設長が食には人一倍こだわりを見せることも付け加えておきます。
研修会や研究発表で選択メニューの話が出る度、学舎で実施するかどうか討議されてきました。その結果、果たして寮生にどういう反応があるのか、それらを探る意味もあり、実施に踏み切りました。

メニューはどうせやるなら、そばとラーメン・カツ丼と天丼、というような安直なものにならないよう配慮しました。

二種類をそれぞれ全員分は用意できないので、事前にアンケートを取りましたが、ここで問題になるのは、意思表示のできない重度の方たちなので、先に食堂に入り、その場で直接選んでもらうことになりました。当初は、普段の食堂の雰囲気とはかけ離れた、落

ち着かないものでしたが、最近は大分寮生に定着してきているように見えます。こうして月に一回のペースで実施しています。

しかし、現在のところメニューは二種類で、総食数は人数分なので、終わりのほうの人は選択メニューになりません。(職員が残りを選るようにしてカバりはしていますが。)事前に聞いていても、当日の陽気や体調により、別の方がいいという人が出るのは当然の事だし、責める訳にはいきません。また、ある職員から「学舎のモットーは、家庭的な食事を提供することである。自分の家では、選択メニューなんてやらない。」という意見が出されました。選択食がもし施設内での食生活を、より豊かなものにする手段とするならば、何か矛盾を感じます。様々な外出により、レストラン等で多くのメニューの中から好きな物を自由に選んで食べる機会が増えているのに、なぜ今施設で選択メニューなのか。

(栄養士)



ちよつと一言

毛利 啓銘

二十世紀も残りわずか、皆様いかがお過ごしでしょうか。久しぶりに筆を取り、何を書けばよいのやら書きながら考えている今日この頃です。昨年、歯科大学を卒業し毎日を多忙に過ごす中、時間を持て余していた学生時代が恋しく思えるのは世の常なのだろうか、などと下らないことを最近ばかり考えています。医療に従事してそろそろ一年がたちますが、それも交えて話したいと思います。

そもそも人が生きていく上で、それぞれに障害というものはつきまとうもので、それは生活そのものであったり、身体であったり、人間関係であったりするもので、その種類や程度は決して比較できるものではなく、個人それぞれが受け入れ、対処するものだと思っています。またそれによりだれでも何かを獲得したり、ある意味成長するのだと思います。偶然にも私の弟が障害児として生まれた為、自分の周りの多くの人は少し違う体験をすることになりました。父が仕事柄、無医村での診療を行っていたので、幼年時代は、山と川に囲まれた旧舎で過ごし、今思えばそれも貴重な体験でした。休みの日となると、山や川に行き、暗くなるまで遊んでいました。周りに気を遣うこともないの

で弟とともに走り回っていました。自分の弟が障害児という認識はありましたが、幸いにも身体には何の問題もなく、会話こそできませんが、それでもごく普通に泣いたり笑ったり、ケンカもしました。周りの人達は僕達のことを「大変だね」とか言っていました。が、今ひとつピンと来なかった気がします。

村は、人口約三千人の小さな村で、一学年一、二クラスが当り前でした。昔ながらの風習が今だ引き継がれていて、ある意味で差別や偏見もあったと思います。当然、養護施設というものもなく、ましてや、障害児に対する教育といったものは皆無でした。その中で父や母の苦勞は大変であったと思います。

時代の流れとともに我々の生活というものは絶えず変化しています。しかしながら生きるということとは、それがどこの国であろうが、いつの時代であろうが決して変わることはないものだと考えます。人としてあたり前のことをあたり前にできなくなってきた現在(特に政治)色々な意味で障害をもった人達はそれを教えてくれるような気がします。弟を通じて私も様々な人達と出会うことができました。

ある時、弟の学校のある女の子が私に向かって言いました。「私〇〇先生が好きなの、だから今つきあってるの。先生の子供産むんだ。そうだ、子供ができて女の子

がいっぱい産まれたら、あなたにも一人あげるね。」その時の女の子の態度はまさに一人の女性としてのものでした。恐らく〇〇先生もその子に話を合わせたのだと思いますが、それでも私にはその子ととても幸せそうに見えました。彼等は我々より背負っているハンディが少し多いだけで、むしろ我々より人間らしいのではないかと思います。それは彼等の瞳を見れば、いかに純粹であるか誰しも感じ取れると思います。

現在、歯科医療において障害児に対するものは未だ未開拓だと思います。設備が整っていないとか、責任を負えないとか、ひどい所では金にならないとか。行政においてもそれらに対する包括した処置をおろそかにしているように思えます。老人及び障害者に対する社会

のあり方が、この先、実は我々の存亡に関わっているのだということとを忘れてはなりません。自分自身まだまだ勉強しなければならぬことは山ほどあり未熟な点も多々ありますが、人として大事なことは、混沌としている現在でも実は一番簡単な事であったりすると思います。それぞれに様々な苦悩を抱えていると思いますが、楽しく二十一世紀を迎えようではありませんか!

皆様の微笑みを期待して完文したいと思います。ありがとうございました。



調教されて

宮崎 理

ふる里舎で初めて覚え、ときめいたことがある。それは、福利厚生事業となつていくスキーとサラブレッド観戦ツアーである。今回はその一つ、サラブレッド観戦ツアーの短いながら濃密な二日間の話を書きたいと思います。

昨年も参加したこのツアー。前日から気分が高揚し、待ち遠しくて仕方がない。この気持ちを例えるならば、子供が遠足に行く前日の気持ち、お父さんがゴルフに行く前日の気持ちと同じであろう。とにかく天気だけでも晴れて欲しいと思いつつ、浅い眠りについた。

五月十日 土曜日、曇一つないまさに藍馬日和である。高まる気持ちを押さえて、出発の時間を待った。この先は、先輩、後輩は関係なく最後

に笑っていられる者が勝者であり、まさに下克上の世界である。ホテルに着いて休む間もなく競馬場へ、そして着いた先に見えたものは、光輝く緑の絨毯と、その上を力強く踏みしめ、躍りながら疾走する馬の姿である。馬券のうまい買い方を知らない自分はこの光景を堪能するだけでも来た甲斐があったと思えるほど、目が釘付けになっていた。しかし、次の瞬間には馬券売り場に走っていたのである。ここで焦つたのがいけなかったのか、数時間後には全てのレースに惨敗し、ただ夢であることを願っていた。下手の横好きであり、熱くなつたら冷静さを失い周りが見えなくなるこの性格は、ギャンブルには不向きと思つてはいたが、これだけ負け続けると思惑なことには清々しい感じがした。

競馬が終わった後は昨年と同じパターン。パチンコをして、居酒屋で酒を飲み、夜の街をふらつき、夜食のラーメン屋まで前回と同じである。その頃には、財布の中身など気にならないほど楽し

い時間であったのだが、二日目ははつきり言つて思い出したくもない。

結局のところ、これはギャンブルツアーである。しかし、このツアーは意外にも歴史が深く、平成五年秋に施設長他一人で大國神社で厄払いをし、その際に競馬をした事から始まっている。

これを讀んだ人は、何をしているのかと不思議に思うかも知れない。しかしこれだけ遊びと何故か仕事がついてくる。全く不思議な感覚である。これが息抜きということではないか。この息抜きこそが明日への活力であり、さらには、長寿の秘訣でもある様な気がする。秋もこのツアーは企画される。今度こそ会えるだろう。勝利の女神に!

編集後記

大学生の五月病に加えて、最近では新入社員が六月病が増えてきているそうです。私も学舎にきて三ヶ月の新人ですが、六月病にかかる暇もなく毎日が過ぎていきます。作業や食事、入浴はもちろんですが、歯みがきや洗濯の仕分けなど色々な仕事があります。その中で一番私が苦手なのは、何と言つてもベッドメイキングです。簡単そうに思えますが、ピシッとシワなくきれいに仕上げるのはかなり至難の技です。素早くきれいに出来るようになる頃には、私も一人前になっていることと願いつつ...

佑啓二十四号をお届けします。

安藤 美和子

